

英訳・解説

W・L・クック・Jr
ドリス・ヴェーラウ

日本語版監訳

小池孝良
清水裕子
伊藤太一
芝 正己
伊藤精悟

森林美学

H・フォン・ザーリツシュ

Heinrich von Salisch
Forest Aesthetics



海青社



Walter L. Cook Jr. (1931-)

1931年米国オハイオ州生まれ。1971年にニューヨーク州立大学林学にて、森林美学の研究で博士号を取得。1971年からジョージア大学森林資源学部で教鞭をとり、1996年に教授として退職。在職中は、森林工学、森林公園、森林美学、自然保護区域管理などを指導した。また、大学で教鞭をとる一方で、1973年以来トレイルデザイナーとしても活動している。ジョージア州やサウスカロライナ州の主たる自然歩道の70以上を設計した。代表作として、年間5万人の利用者を動員し、約4マイルに及ぶ、ジョージア州の自然歩道Cook's Trailがある。本書翻訳の原動力となっていたのは、19世紀末の中欧の状況と20世紀末の米国の状況と酷似した一斉皆伐林施業重視の林業の商業主義化に対し、森林の美しさを引き出すことが、木材生産の収益を落とさないことの可能性を論じた、古くて新しい、森林管理への共感であったと思われる。



Heinrich von Salisch (1846-1920)

1846年プロイセン・シレジアのイエシュツツ生まれ。父ドルフはプロシアの貴族(ユンカー)。1866年にエーベルスヴァルデ山林学校で林学を学び、森林官の職についた。1874年に森林官を辞し、父からポステルの土地を譲り受け、700ha近い林地の林業経営を行った。彼の森林美の考え方は、英国人のギルピンによる森林風景のピクチュアレスクな荘厳sublimeに共感するもので、それが自然の持つ科学的な真実と一致する点に感銘している。本書では「林業の商業主義化とそれに伴う皆伐に対抗して、山林管理者はちょっとした譲歩で、単に森林の魅力を保護するだけでなく、森林の美しさをさらに高めることが、収益を落とさずともできる」と論じた。第一次世界大戦後の1920年にその生涯を終えた。2010年に地元ポーランドで没後90周年記念シンポジウムが開催され、その後、国際森林年にかけて、地元の英雄を讃える中で、欧州でも再度注目されている。

Forest Aesthetics

Heinrich von Salisch

This book was originally published as *Forstästhetik* by Heinrich von Salisch (Springer, Berlin 1902.)

Later it was translated into English as *Forest Aesthetics* (©Forest History Society, North Carolina, USA, 2008.) by Prof. Walter L. Cook, Jr. and Ms. Doris Wehlau.

Then it was translated into Japanese from the English translation by a team supervised by Takayoshi Koike, Yuko Shimizu, Taiichi Ito, Masami Shiba, and Seigo Ito.

The publication of this book was made possible thanks to the kind cooperation of Prof. Walter L. Cook Jr. and the Forest History Society (FHS), which allowed its member, Dr. Takayoshi Koike, and his associates to carry out the Japanese translation.

First published 2018.

ISBN978-4-86099-259-0(Paper back)

Printed in Japan.



KAISEISHA PRESS

2-16-4 Hiyoshidai, Otsu City, Shiga Prefecture 520-0112, JAPAN

Tel: +81-77-577-2677

Fax: +81-77-577-2688

<http://www.kaiseisha-press.ne.jp/>

銘：

凡庸な頭には技能に留まるところ、
優れた頭ならそれが芸術となる。
ゲーテ、“ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代”

Motto:

*For the minor head it always will be a craft,
for the better one an art.*

Goethe, Wilhelm Meisters Wanderjahre

Motto:

*Für den geringsten Kopf wird es immer ein Handwerk,
für den besseren eine Kunst.*

Goethe, Wilhelm Meisters Wanderjahre

日本語版出版に寄せて

ウォルター・L・クック・Jr.

森林美学の訳者であるドリス・ヴェーラウ Doris Wehlau と私は、ザーリツシュのドイツ語の森林美学を英語に訳しましたが、それを今も楽しんでます。それは、北海道大学農学部造林学研究室のグループから、私たちの翻訳本の日本語へのさらなる翻訳の願いを求められたからです。控えめに言っても、これは私たちにとって驚きでした。振り返ってみても、このような要請は全く予期してはいませんでした。しかし、美しい森への関心と熱望が、そこにはあり、世界各地には、それぞれ数多くの詩、エッセイ、絵画、そして風景計画が培われています。風致を醸し出し、レクリエーションの場を提供する魅力的な存在である森林への感謝の気持ちは、国を問わず共通しているのです。

森林美学の著者、ハインリッヒ・フォン・ザーリツシュ Heinrich von Salisch はロマン主義庭園の考え方や絵画に見られる哲学的な“美”を、森林美学へと拡張しようと初めは試みました。その後、可能な限りの文献の探究と林業家として、さらに土地所有者としての実践を経て、彼の思想を有機的に、かつ論理的にまとめ上げ、それらを基礎にして“森林美学 *Forest Aesthetics*” を刊行しました。その 65 年後、私は修士課程の研究課題として、“森林美学と木材収穫：文献の論評” (1969) を研究していた時に、ドイツ語の森林美学 (1902 年刊行の第 2 版) を、シラキューズにあるニューヨーク州立大学の“ムーン”図書館にて見つけたのです。

私は全てを読み通すことは出来ませんでした。その本が私の関心事に真に合った森林美学であることが解りました。そして、この本がベルリンで刊行されて百年後に、ドイツのエッセンから来た大学院学生のドリス・ヴェーラウ嬢と共同して私は英訳を行いました。さらに 17 年の時を経てアメリカの森林史協会から、この翻訳が刊行されました。そして今、プロシア (旧ドイツの一部

* Cook, W. L. Jr. 1969. *Forest Aesthetics and Timber Harvesting: A Critical Review of the Literature*. (森林美学と木材収穫：文献の論評), Master's Thesis, College of Environmental Science and Forestry, New York State University.

名称)のポステル地方で行われた試みが、世界を巡って北海道大学造林学研究室のグループによって、新しい生命を得るのです。

私は、今、確信しています。19世紀のハインリッヒ・フォン・ザーリッシュ、21世紀のウォルター・クック Walter L. Cook Jr.、そして、21世紀の北海道大学造林学研究室小池孝良門下と信州大学伊藤精晤門下グループにおいて、美しい天然生の森林を保護し、改良し、創造していこうという思いは、私たちに共通していることを。私たちには、各々の自然林の美と文化があります。私は世界で初めて国立公園を制定した文化に生まれ、そしてウィルダネス Wilderness^{*訳注}を保護する世の中の潮流に貢献してきました。

アメリカ合衆国では、19世紀において、アメリカの風景画家グループ、それはハドソン・リバー・スクール Hudson River Schoolとして知られ、イギリスの風景計画学の影響を受けていますが、その彼らが、私たちの森林景観に対する独自の解釈を生み出しました。これらの事実が、それまで木材生産の場を目指してきた伝統的な森林管理に関する私の教育と実践に大きな影響を与え、ついに、私はジョージア大学大学院において森林美学を考究する決意をしたのです。この流れは、しかし、ザーリッシュの経験則にある経済的な林業を重視した考え方とは異なるものなのです。

2009年5月

米国ジョージア州アセンズにて

*訳注 ウィルダネスの解説は以下を参照のこと。

伊藤太一著“アメリカにおけるウィルダネス保全の変遷(Ⅰ)国有林でのウィルダネスの設定, (Ⅱ)国有林でのウィルダネスの展開, (Ⅲ)ウィルダネス法の成立過程”, (Ⅰ)日本林学会論文集101:47-148, 1990, (Ⅱ)同102:119-120, 1991, (Ⅲ)同103:235-236, 1993. “アメリカの国立公園とその保全. 伊藤精晤編著: 森林風致計画学. 文永堂. 158-172. 1991.

日本語版序文

伊藤 精 皓

今日、日本の林業・森林政策は、地球温暖化対策などに関連して林業から環境に比重を移しています。

林業は森林育成を進める経済的動因である点で、環境と両立するものですが、木材収穫の側面だけを過大に評価して環境破壊として非難されることもありました。しかし現在は、木材価格低迷から収穫がなされずに放置されることが問題となっており、それによって環境悪化を招いているといえます。

林業の低迷が、林業労働力を減少させ、さらに低迷の原因となっている一方で、環境問題の緊急性が大きくなり、大学の森林に関連した分野も、林業生産に関する造林学、森林経理、経営学などから、生物多様性や環境・景観保全のための専門へと転換が図られる傾向があります。日本は明治になって国土的な森林管理と林業の成立のためにドイツ林学を導入したのですが、ドイツでは国土計画、地域計画に連携する景観保全が重視される一方で、森林の木材生産と管理、利用も平行して重視されています。景観保全が林学に代換するものではなく、林学が森林科学と名前を換えても、森林環境の利用・管理と木材生産は、車の両輪と言ってもよいでしょう。

ドイツにおいて森林美学は、木材生産の優先から環境とのバランスが問題とされる時期に著されています。著者のフォン・ザーリッシュは“功利と美”の調和を森林美学の主要課題としました。美は健全な森林環境からもたらされ、森林を訪れる人の高い知性がその美を深く感得することを、実際の森林経営を通じ、先端の科学によって明らかにしようとしたと言えます。その後を受けて、メーカーは、森林を有機体として維持することによって、功利と美の調和が実現することを恒続林思想によって明らかにしました。^{*}

フォン・ザーリッシュの“森林美学”は1885年の初版、1902年の第2版、

* ドイツ林学における森林美学の歴史については以下を参照のこと。

今田敬一著“森林美学の基本問題の歴史と批判”北海道帝国大学演習林報告第9巻第2号：246pp, 1934.

1911年の最終(決定)版に至り、ほぼ1世紀前に出版されています。この第2版の英訳と解説がウォルター・クック氏とドリス・ヴェーラウ女史によってアメリカの森林史協会から2008年に出版されました。北海道大学の小池孝良氏は、フォン・ザーリッシュの日本への翻案として新島善直と村山醸造によって1918年に著述され、出版された“森林美学”とドイツ林学の展開の中に森林美学の位置づけを研究し明らかにした今田敬一によって設定された“森林美学”の講義を継承しています。その講義のために、現代の森林美学に関する研究成果を収集し、講義の内容に構成しようとしてきました。国内の研究者として森林風致計画研究所の清水裕子氏と連絡を取るようになり、また、ドイツにおいて2005年に“ヴァルト・エステティック”を出版したウィルヘルム・ステルプ氏との連絡も取られました。こうした矢先、この英訳本の出版を知られたのです。

フォン・ザーリッシュの森林美学の内容は、新島・村山の森林美学、今田の森林美学研究の中で取り上げられていますが、新島などの日本的森林美学への翻案が、フォン・ザーリッシュの原案の何を汲み取っているか、今田によって進展した森林美学研究の視点は、フォン・ザーリッシュの原案のどこに注目しており、それ以外に評価する点は無かったのか明らかにすることは必要がありました。そこで、このクック氏とヴェーラウ女史の英訳をさらに和訳することが希望されました。小池氏がクック氏へ直接和訳の許可を求めたところ、クック氏から快く許可して頂き、「日本語版出版に寄せて」の寄稿を頂きました。

英訳、森林美学の和訳は、森林美学の多義にわたる内容を、それぞれの専門で分担して当たることになりました。造林学、林学の面で、小池氏を中心に北大の学生と同僚教員の参加によるグループと森林風致、美学の面から清水裕子氏を中心とした信州大学の学生と修了生で森林風致計画研究所の研究者、私などによるグループ、さらに、アメリカの森林史学会にも所属している筑波大学の伊藤太一氏への協力を求め、また、森林工学の面から京都大学フィールド科学教育研究センター(現在、琉球大学)の芝正己氏のグループによって分担しました。ドイツ語人名、地名の日本語読みと引用されたドイツ文学の詩などのドイツ語原文の和訳をドイツ文学の専門家である大澤元信州大学名誉教授に修正をして頂きました。とくにモットーの文章は翻訳家による訳文の引用では森林美学の著者の意図が反映していなかったため、ドイツ語原文の翻訳をお願いしました。また、訳者の一人である岡崎朝美氏に引用された文学作品の一節を

ドイツ語原文から翻訳し、英文からの翻訳の妥当性を検討しました。美学に関連した部分は喜屋武盛也沖縄県立芸術大学准教授からご意見を頂きました。英訳を和訳する上では、意識しても内容はそれぞれの訳者が二重のチェックで正確となるよう心がけています。

英訳の著者であるクック氏は、アメリカで現在、何故、フォン・ザーリッシュの翻訳が必要であったのかを明らかにしていますが、日本ではフォン・ザーリッシュの森林美学の意義はどこにあるのだろうか。前述しているように、フォン・ザーリッシュの森林美学から、日本の森林美学も始まっており、原典といえるものであり、当初に翻訳が存在してもおかしくはなかったでしょう。しかし、新島などの森林美学からも、すでに第二次世界大戦を挟んで、ほとんど90年を経過しています。戦後に森林美学が省みられなくなりますが、高度経済成長のもとで多くの森林公園の設定に伴う風致施業の必要によって、森林美学の再認識が行われたといえます。しかし、同時期に既に国内木材の需要の低迷と森林利用、育成の衰退が顕著となってきました。

こうした社会的変動は、フォン・ザーリッシュの森林美学にも、森林保護、森林利用の社会的要求として反映しており、フォン・ザーリッシュ自身も郷土保護運動に積極的に参加しています。日本においてフォン・ザーリッシュの森林美学の展開をはかった人の一人が田村 剛氏であったことは、今回の訳書の編者となっている清水氏が研究論文としています^{*}。そこには、田村が戦前に“森林風景計画”を著して、ザーリッシュの森林の風致的取扱いの技術展開と休養地計画を論述し、国立公園設定に貢献することによって、保健休養における森林利用の推進をはかったことが明らかにされています。戦後、田村は国立公園協会、自然保護協会に依拠して自然保護運動を展開し、戦後の過度の森林開発に自然保護の立場から対抗しようとしたといえます。戸外休養の増大に対処した森林公園の全国的な設定は、田村の森林風景計画が東京大学の塩田敏志氏らによって継承されるものとなったといえます。

私は今田先生の紹介で京都大学の岡崎文彬先生のもとで、森林風致施業研究に取り組むようになり、森林公園増設の時期から森林公園の計画とともに、風

* 日本の戦前までの森林美学の導入の過程は以下を参照のこと。

清水裕子他著“戦前における森林美学から風致への展開”ランドスケープ研究 69: 395-400, 2006.

致施業の可能性を検討してきました。その経験は、伊藤太一氏を含めた共著者による“森林風致計画学”として出版されています。岡崎先生は森林経理学と造園学を同時に専門とされ、戦前、森林美学の研究を志して、今田先生とも交流があり、高度経済成長期の戸外休養利用の増大によって森林美学再興の必要性を意識されて、京都大学における森林風致施業研究チームを組織され、私も加えていただくことになりました。岡崎先生は“森林風致とレクリエーション”の著書を著して、社会的要求に対処する森林の風致的取り扱いの方法を系統的に論述し、今田先生が森林美学の帰結とした“恒続林思想”を具現化した照査法による森林管理に、風致施業を帰結させています。また、功利と美の調和という森林美学の課題に、林業と社会的利用効果、さらには、観光による経済的效果などによって、森林の風致的取り扱いの具現化の可能性を指摘していました。

今回、私がここで巻頭言を書くことになったのは、フォン・ザーリッシュに始まる日本の森林美学の大きな流れの中で、北海道大学の森林美学の講義が不変の柱のように存続し、その中心となった今田先生に学んだ関係の生き残りであったからでしょうか。今、この講義を受け継いだ小池氏、また、森林美学から森林風致へと流れを汲んで果敢に研究展開を図る清水氏などへの中継ぎとなるからでしょうか。この記念すべき訳業にとって、偶然にも光栄ある役に当てられたことを、心から感謝しています。

2018年3月

信州松本、NPO森林風致計画研究所にて

日本語版の翻訳について、本書1～314頁の文中で()内に示されているテキストは、フォン・ザーリッシュの原著でも()で括られていたものです。また、英語版の翻訳時に加えられたテキストは[]内に示されています。さらに、日本語版で追加したテキストは[]内に示し、訳注は脚注として示しました。

全体の構成に関して、本書は第2版の翻訳版のため、英語版の「付録」に含まれていた、「第1版の注および参考文献」と「第3版に対する論評記事」は日本語版では割愛しました。また、「付録」に掲載されていた図版の説明文は、読者の便宜を考え、本文内の各図版に挿入しました。

フォン・ザーリッシュ“森林美学”の 翻訳にあたって

ウォルター・L・クック・Jr.
ドリス・ヴェーラウ

この翻訳は2つの世紀、2つの大陸、そして3人の著者にその起源を持ちます。この著者とはハインリッヒ・フォン・ザーリッシュHeinrich von Salischです。彼は、彼の生存中(1846～1920)にはプロイセン、ドイツ帝国の一部であり、亡くなった後には(1945年以降)ポーランドの一部となったシレジア地方の地主貴族であり森林官でした。この翻訳の共編者の一人である私は森林官でもあり、アセンズAthensにあるジョージア大学ダニエル・B・ワーネル森林資源学校Daniel B. Warnell School of Forest Resourceの教授です。そしてドリス・ヴェーラウDoris Wehlauはもう一人の共訳者であり、古い活字体Frakturによる原著からの第一訳者でもあります。彼女はドイツの造園家で、翻訳当時(1992～1993年)はジョージア大学の環境デザイン校の修士課程の学生でした。

最初私は“森林美学*Forest Aesthetics*”を、シラキュースSyracuseのニューヨーク州立大学林学科での修士論文作成中に知りました。その本は大学の図書室にあったのですが、私は読むことができませんでした。しかし、私は自分の論文のテーマ“森林美学と木材収穫：文献の論評*Forest Aesthetics and Timber Harvesting: A Critical Review of the Literature*” (1969)でその重要性に気がつきました。そして2、3年もたたないうちに、ドリス・ヴェーラウが私の講義、ウィルダネス管理学Wilderness Managementに出席した時ですが、現在の内容を明らかにする機会を得ることができました。フルブライト奨学金によってジョージア大学に学ぶドリスは、私がこの本の話をしませんでしたら、このチャレンジを快く受け入れてくれました。

ドイツ語を読むことができない私の挫折は、フォン・ザーリッシュが英語を読めないことを後悔したことと共通します。多くの引用文があるギルピンの1791年の本、“森林風景*Forest Scenery*”は、ドイツ語に翻訳されたために彼が利用できた、ただ一冊のこの主題に関わる英語の本でした。同様に、森

林美学を読んでいく中で、私はヘルマン・ピュックラー侯 Prince Hermann Pueckler の著書“ランドスケープ・ガーデニングの手引き *Hints on Landscape Gardening*” (1834) に気づき、そしてそれが翻訳されていることを発見し、事実、それはジョージア大学の図書館にありました。

森林美学の翻訳は森林風致の史料として、学生の利用できる原典に加えられる事でしょう。しかし、私は史料と言う言葉をためらいながら使っています。なぜならば、森林美学を学ぶ中で、私はしばしば 19 世紀後期のシレジア (広義には中央ヨーロッパ) の思考や嗜好そして問題点と 20 世紀後期のアメリカとの類似性に驚いたからです。とりわけ、1) 森林から高い財政上の見返りを探し、森林の美的価値を信じるフォン・ザーリッシュと私自身のような、これらの森林官の間の主張は、利益のリストに一つの場所あるいはもっと目立った場所を受けるに値します。2) フォン・ザーリッシュの森林を訪れ、伐採によって引き起こされる視覚的な混乱に苦情を言う都市からの旅行者の記述(そして意見)。3) “ヴィルデュンゲン Wildungen の狩猟官の夕べ” から引用した若い 2 人の理想家(画家と詩人)と森林官との遭遇を記述した 1 部、A 編 5 章の筋書きです。考えがはるかに離れた彼らは、実際、彼らの回り囲む森林の質について、各々の意見を通い合わせることができません。フォン・ザーリッシュが示したこれらの問題と意見は、今年の特集をみると現実に生じており、この意味では最新のものです。

翻訳にはいくつかの困難がありました。古い字体のアルファベットを判読する人はドリスよりも私にとって大きな問題でしたが、彼女でさえ時には問題となりました。より多くの深刻な問題は、最新の言葉の古い意味と同様に、古風な言葉であったということです。私たちが訳された出来事を読み、実際それを認めるまで、意味における変化に気づかず、多くを感じられなかった状況があります。そこで、われわれはフリーゲルの辞典 4 版(1894 年)を調べました。この辞典がなければ、私たちの翻訳の価値はきっと失われていたでしょう。

多分、もっとも深刻な問題と私たちが解決をせねばならなかったことは林業用語です。そのほとんどはフリーゲルの辞典にはありません。幸い、林学科の私の同僚のクラウス・スタインベック博士が、1939 年に出版された彼の独英林業用語辞典を私たちに貸してくれました。それでさえ、わずかな用語は間違っていて、現代のアメリカ林業において実際に使っている意味ではありません

んでした。これらの用語のいくつかは、読者が本を開くまえに参照される方がよいかもしれません。なぜなら、私たちの用語の選択は、特に読者が19世紀のドイツ林業に詳しくなければ、誤解を招くかもしれません。

この時代のドイツの林業技術者たちは、彼らの森林を私たちが林班と称する獵区Jagenに分割しました。ここでは何の問題もありませんが、しかし、獵区は米国の標準よりはずっと狭かったのです。問題は彼らの境界線の示し方です。それぞれの林班は区画線Gestellenによって分割されている事です。区画線は林班の間を明瞭にする細長い林地で、英語で表すことのできるごく近い言葉は防火帯です。私たちは防火帯と言う言葉を使用しますが、しかし、区画線にこのような目的があったかどうかに関しては、何の論拠もありません。私たちは、区画線の目的をはっきりとは判定できませんが、おそらく、多少は林班からの木材の搬出路として使われていたでしょう。フォン・ザーリッシュがカソリック・ハンマーKatholisch-Hammerとして知られる森林に私が最近訪ねた時には、いくつかの、しかし全てではありませんが、林班は明瞭な細長い林地の境を示し、そしてその細長い林地の多くは進入路として利用されていました。

例えば、ドイツ語のFreie Anlagenは、それらの字義と文脈から公園風景観park-like landscapeと訳されます。同じくKnickはどうやら古語体か方言での“ヘッジロウ”のようですし、生垣の意味であるHeckenと混同するかもしれません。林業・林学辞典によればFemelschlagは画伐、傘伐、漸伐Shelter-selection cuttingであり、アメリカでは知られていない、ないしは、異なる名称で呼ばれているか、のいずれか一方です。どちらにしても、択伐林selection forestとその意味の差異は明瞭ではありません。Absaumungen、または時にはRandabsaumungenは、字義によれば、林縁の立木の伐採ですが、細長い林分の発展形としての狭小面積の皆伐として決定されました。私たちは字義の翻訳とかけ離れないように勤めましたが、時々文脈に大いに頼らざるを得ない事もありました。Abnutzungまたは“消耗させるusing up”は、林分を皆伐するという文脈の中で使用される時は“根絶liquidation”となりました。著者は辞書の中での見解によって判断すると、しばしば通常使用されないような意味で語彙を使用する時があります。私たちがついには正しいと認める語を探り出す事は、多くの意味を探り、時には適切な文脈の中での言葉を探るという試行錯誤を必要としました。私たちは、フォン・ザーリッシュの仕事の正当な意味を

捉えている事を、心から望みます。

もうひとつの、あまり重大ではない事かもしれませんが、スタイルと構成に著者のそして出版者の一貫性がないことなのです。私たちは結局、読本を混乱させる危険よりも、むしろ、章、見出し、余白、説明文などを標準にして決定しました。それにも関わらず、構成スタイルの場合に、著者の労作を終止符と非常に長い省略形というわけではなく、現れる終止符のおかしな連続やダッシュの普通でない使用でさえできる限り残そうと試みました。実際の記述は、ほとんど会話調に記されている箇所があり、私たちはその性格を残そうとしました。

索引は最小限で刊行しましたが、いくらかの独特の問題がありました。時々、言葉や、話題が明らかに本文には表れませんでした。一つの例をあげると間違っただけ同じ言葉が使われてきました。いくつかの例では、複合的な類義語が本文にただ一つある時、目録に載せられました。例えば、ZirbelkieferとArve (*Pinus cembra*)が両方とも索引にあります。Arveは本文に1回だけ見出せます。同様に、Bienen (bees)とZeidelweide (bee-keeping)の両方も索引に見出せますが、後者だけが本文にあります。私たちは冬景色 winter landscape と冬の景観 landscape, winter のような、重複の記載を残すことはしませんでした。

樹木、灌木類、他の植物の名前は、同じ時代、同じ言語でさえ、しばしば難問です。100年前の名前で外来樹種を決定することは、全くの挑戦です。ドリスは栽培広葉樹のクルスマン Krussman の手引書と南西部の植物群落 (サム・ジョオンズ Sam Jones とダレル・モリソン Darrel Morrison の解説した未刊行文献) を名前の最初の原典として使いました。これらは、樹木学と植物分類学におけるいくつかの他の標準的な著書を参照して、必要な場所を照合し改正しました。わずかな名称がフリュエゲルの辞典: *Fluegel's Woerterbuch* から得られました。

英語版序文を除いて、私たちが加えた文章のすべては角括弧内に示してあり、ほとんどのものには意味を明確にするための類義語を加えています。丸括弧内の文章は、原著でも同様に丸括弧で括られていたものです。ドイツ語のウムラウトは母音の次に e を加えて代えました。ä は ae となり、ö は oe となり、ü は ue となります。場所の名前はドイツ語または英語です。英語版序文では議論の時代によって、ポーランド語とドイツ語(または英語)を使用しています。

翻訳の第1版(1885)あるいは第3版(1911)よりもむしろ第2版(1902)を翻訳の対象にした理由は“状況”によるものです。第2版は多数の図書館から図書館相互間の貸出しによって容易に入手できました。それは第1版から大幅に拡張されており、著者の最初の努力の改良の機会と同様に17年の経験が加わった長所を持っていました。第3版は容易に入手もできませんでした。著者は第2版では注および参考文献を繰り返さなかったため、そのために第1版を得なければなりません。これらは付録に含めました。ドイツの専門誌から第3版に対する論評も含めました。しかしながら、論評者は改訂の改良を認めたにも関わらず、いかなる大きな変更であったかは示しませんでした。

英語版序文のほとんどは、彼の時代の地理学的、政治的、社会的、哲学的状況に照らした自然と自然美に対する著者の態度の包括的な批評のドリスからの要約です。今日の環境におけるアメリカと同様、中央ヨーロッパにおける環境の適合性が議論されます。私は、1993年のアメリカと1893年のシレジアの森林の問題と本の刊行を、2つの時代の多くの不思議な共通性を、特別の意識をせずに比較します。また、歴史的庭園と宮殿の維持をしてきたポーランド当局とミリチュMilicz森林地域の森林官の寛大な援助で、私は著者の以前の邸宅と所有地と彼がテキストにおいて、例として度々使った近くの公有林の現状を記述します。

1994年3月

Ｈ・フォン・ザーリツシュ
森林美学

目次

日本語版出版に寄せて.....	ウォルター・L・クック・Jr	iii
日本語版序文.....	伊藤精悟	v
フォン・ザーリッシュ“森林美学”の翻訳にあたって	ウォルター・L・クック・Jr & ドリス・ヴェーラウ	ix
英語版序文.....	ウォルター・L・クック・Jr	xxi
多くの事が変わった.....		xxi
美学の変化と林業への適用.....		xxxv

Forstaestetik 1

初版への前書き.....	フォン・ザーリッシュ	3
第2版への前書き.....	フォン・ザーリッシュ	4

第1部 森林美学の基礎理念 5

セクション A：序章.....		5
第1章 森林美学の用語と役割、森林科学の特殊分野としての森林美学 の歴史と文献——研究の必要性——.....		5
第2章 美の歎喜の原因.....		18
セクション B：自然の美.....		36
第1章 自然美と芸術美の関係に関する基本的見解.....		36
第2章 ランドスケープにおける色彩の理論.....		40
第3章 森林の装飾としての石.....		54
第4章 樹種の美的価値.....		64
第5章 森の芳香と声.....		114
第1部のまとめ.....		118

第2部 森林美学の応用 119

セクション A：森林造成と森林経済.....		119
第1章 最適な土地利用の決定.....		119
第2章 林道設計、管理単位の設定および名称.....		130
第3章 作業種.....		147

第4章	樹種の選択.....	162
第5章	伐期齢の決定.....	167
第6章	更新.....	176
第7章	林分の手入れ.....	184
第8章	副次的な利用.....	193
第9章	草地、水面、畑地—林縁、生垣、柵—.....	199
セクション B: 美への関心に基礎を置く森林の装飾		209
第1章	公園か森林か.....	209
第2章	美しさが高められた森林.....	215
第3章	公園風景観の維持管理.....	219
第4章	道路の開設と装飾による森林の高揚(交差路、道路標識).....	230
第5章	道路や防火帯に沿った植樹.....	239
第6章	森林の装飾としての老木.....	251
第7章	外来樹種と在来樹種の変種の美的利用.....	261
第8章	灌木類と地被植物の管理による林分の装飾.....	273
第9章	石礫による森林の装飾.....	277
第10章	記念碑、廃墟、砦.....	283
第11章	眺望.....	283
付録.....		293
索引.....		309
アメリカにおける森林美学の展開.....		伊藤太一 315
訳者あとがき.....		小池孝良 323

図表目次

英語版序文

地図1	南西部ポーランドの地図で著者ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュの生地でありミリチュの南西部9kmに位置する.....	xxiii
写真1	14世紀の第2期にオレスニキッヒ候によって建設されたゴシック式城郭の廃墟.....	xxiv
写真2	ポステリン＝カルミンのくずれた邸宅：フォン・ザーリッシュによって一度は所有されてきました.....	xxvi
写真3	ポステリンにあるフォン・ザーリッシュ公園への入り口の印.....	xxvii
写真4	ポステリンにある公園の中に生育するピラミッド型オーク.....	xxviii
写真5	ポステリンの公園にあるシデ.....	xxix
写真6	ヤマアラシ.....	xxx
写真7	フォン・ザーリッシュの父親が1850年に建設しミリチュの森林官達が修復したヨハンナの塔(狩猟の塔).....	xxxii
写真8	ヨハンナの塔を囲むこの150年生のブナ24haの林分はフォン・ザーリッシュが「ポステル間伐法」を実践した場所のようです.....	xxxiii
写真9	四つの区画の境界線の交差点にある花崗岩でできた位置標識.....	xxxiv
地図2	フォン・ザーリッシュの邸宅、公園、村、ポーランドとその周辺のドイツ地図.....	xxxv
写真10	106年目で伐採されつつある区画.....	xxxvi

第1部 森林美学の基礎理念

セクションA：序章

図1	黄金比.....	28
----	----------	----

セクションB：自然の美

I	岩石、石、土砂を運ぶ急流.....	56
図2～7	石の配置.....	58～62
II	スザンナオーク：ポステルにある Kaelberwinkel の境界で保存されている標準的な樹木.....	66
図8～16	天然のオークの葉.....	72
図17～18	ヴィルヘルム1世によって描かれたオークの葉.....	73～74
図19	カソリック・ハンマー王立森林局の区画167にある枝が垂れ下がったマツ.....	93
図20～21	カバノキ属のヨーロッパシラカバとヨーロッパダケカンバ.....	103

第2部 森林美学の応用

セクションA: 森林造成と森林経済

Ⅲ	ネジゴード動物園内の島にあるハンノキ	129
Ⅳ	ポステルのダンケルマン通り	134
図 22~27	道路網	136~141
図 28	カソリック・ハンマー王立森林局の区画 63、89、90 における皆伐に よって開けた眺望	142
図 29	高林における眺望の変化の模式図	143
図 30	道路網	144
Ⅴ	ポステルの保残木作業のマツ林の下生え	155
Ⅵ	ポステルにある、枝を短く刈り込まれたヤナギの老木	160
図 31	ミリチェ地方のZwornogoschuetzにおける剪定された樹木	161
図 32	Langengrundのズデーテン山脈: この写真は長く続く山脈とその前に ある尖った樹冠の対比が美しい	165
Ⅶ	ポステルにある、前更更新されたオークの一群とマツの立木(保護木)	178
図 33~35	植林地の模式図	181
図 36	カソリック・ハンマー王立森林局のスピッツ山にあるオークの切り株	184
Ⅷ	ポステルにおけるポステル間伐法を施されたブナ林	186
Ⅸ	ミリチュ道にあるオーク	192
X	オーラウの近くにある皇太子の所有林	200
XI	ネジゴード動物園の人工ダムの縁	203
図 37~38	ポステルで用いられている池の堰の模式図	204
図 39	カソリック・ハンマー王立森林局の林縁で択伐のように形作られた樹木	205
図 40	ポステルのミュラーヘーゲにあるブナ林の林縁にあるブナ	206
図 41	生垣の植栽の模式図	208

セクションB: 美への関心に基礎を置く森林の装飾

図 42	ポステルにあるヨハンナの塔	217
図 43	ポステルにある区画 48b のズザンナのマツ林	219
XII	クラッツカウにある開放的な景観	221
XIII	ポステルにある村の共有牧草地に生育する野生の西洋ナシの木	224
図 44	長く続く丘の上の樹木の伐採方法に関する模式図	227
図 45~46	直交する防火帯の装飾に関する模式図	233~234
図 47	図 45 の C の方法に従って植えられたポステルとプロットの境界にある オーク	235
XIV	ベルリン動物園の花広場にある並木	237
図 48~52	道路による境界と並木の模式図	240~245
図 53	1885 年に出版された Gaucher の「接木法」に従って四角く形作られた	

	果樹の樹冠.....	247
図 54	1891 年に出版された Gaucher の「果樹育成の実践」に従って四角く形作 られた果樹の樹冠.....	247
図 55	内部にレンガの支えを施した幹.....	258
XV	ポステルにあるエミリーブナ.....	260
XVI	ライヒャルツハウゼンにある Moenchsau 島からのライン川の渓谷の景色	272
図 56	自然に積み重なった岩石.....	280
図 57	自然に積み重なった岩石：3つの石を1つの大きな石に見せる配置法.....	281
図 58	自然に積み重なった岩石：良い水の流れを導く配置方法.....	282
図 59	カソリック・ハンマー王立森林局の区画 89 にある前更更新された樹木の 一群.....	289

英語版序文

ウォルター・L・クック・Jr.

多くの事が変わった

この英語版序文では、ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュ Heinrich von Salisch が 1885 年に“森林美学 *Forstaesthetik*”を著してから生じた 2 つの変化についてコメントしましょう。第 1 にはポステル Postel (ポストリン Postolin)^{*}の政治的、社会的、物理的環境の変化です。ここで紹介する内容は、いくつかの原典から集めました。その大部分は共訳者のドリス・ヴェーラウ Doris Wehlau 嬢が記した“ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュによって著された森林美学の史的背景と今日的意義”についての論文で、ジョージア大学の環境倫理学の単位認定のために 1993 年に提出された 131 ページに及ぶ未発表のものに依っています。さらに多くの情報はジョージア大学のイルナ・ポピアシュリによってポーランド語からドイツ語に翻訳された歴史的な庭園や宮殿の保存のためのポーランド会議による資料や地図から得ました。追加情報は、私自身が 1993 年の 8 月と 9 月にポーランドを訪問した時に得た内容です。

ポーランド滞在中、私は会議の副委員長、トマズ・ツヴァイヒ氏に應對して頂き、バートムスカウ Bad Muskau のヘルマン・フォン・ピュックラー皇太子の庭園(今は公園)を訪問しましたが、そこは、現在、ドイツとポーランドとの国境をまたぐ場所です(ポーランドではウエンクニツァ Leknica と呼ばれています)。トマズ・ツヴァイヒ氏とヤコブ・ゼンラ氏はポストリン地方の庭園を見て回る小旅行の際、ポストリン-カルミン地方ではエワルト・ロノセック氏が同行されましたが、彼は以前フォン・ザーリッシュの財産の管理をしていた林業家です。続いて、私たちはミリチュ Milicz の林業家であるマレック・グラベ

* ドイツが管理していた時代では、ドイツあるいは英国式の地名が使われました。ポーランド語の地名は括弧に入れました。現代に関連した記述については、ポーランド語の名称を使いました。

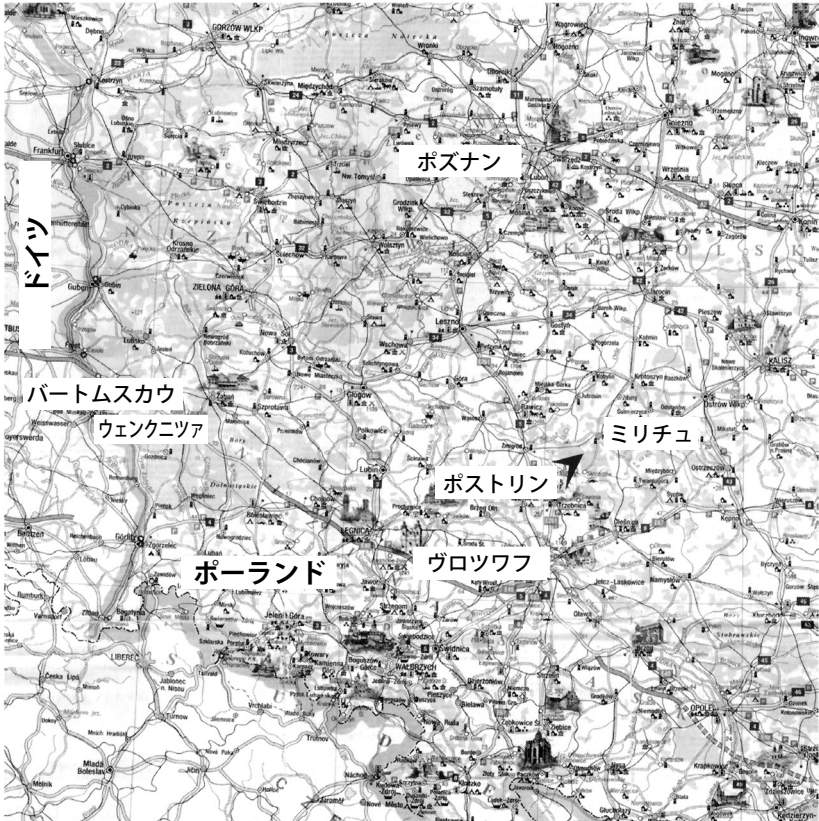
ニイ氏に案内して頂きましたが、彼は流暢に英語を話しました。ポーランドに関する会のアメリカのインターンで、ジョージア大学ではドリスのクラスメイトであったリンダ・ロバートソン氏も私の旅行の全行程に同行され、この旅行がうまく行くように計り知れない貢献をされました。

もう一つの変化は、19世紀後半のシレジア地方と20世紀後半のアメリカでの森林美学と木材生産の間の相違点について評価すべく、翻訳をしようという思いに駆られたことです。この英語版序文の副題に有るように、この2つの相似性は予想以上でした。再度、記しておきたいのですが、ドリス・ヴェーラウ氏の報告が主な情報源です。

ポストリン地方と周辺の地形と土壌は最後の氷河期において形成されました。氷河性堆積物(モレーン)は、比較的平坦な地形として散見できます。無数の池や湖や湿地が北の方にかけて隣りあって存在しています。土壌はモレーンに特徴的な細かな土性を含む植壤土かあるいは砂質埴土です。粗い土壌は欧州アカマツ *Pinus sylvestris* の生育に適していますが、この樹種はもっとも広く植えられている樹木です。細かな土性の土は適潤であり、ヨーロッパトウヒ *Picea abies* やブナ *Fagus sylvestris*、その他の広葉樹や灌木類の生育に適しています。

ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュは1846年にポステルに生まれました。そこは、当時はプロシアの一部であったシレジア Silesia(シロンスク Slask)地方のブレスラウ Breslau(プロツワフ Wroclaw)の北、約50kmに位置する小さな村です(地図1)。重要な最も近い町はミリチュ Militsch (Milicz)であり、北東に約9km離れたクライシュタット Kreistadtの領土でした。ハインリッヒの父、ルドルフ Rudolfは1826年にそこを購入していましたが、ザーリッシュ卿一家の領地は19世紀の前半にはできあがっていました。ルドルフとその家族はプロシアの貴族であり、農民制と封建制の中にありました。ハインリッヒは林学を学びました(彼の父が林業家あるいは風景計画者であったことに感化されました)が、州の管理者の仕事に幻滅し、森林官のトップになる試験は受けませんでした。

1885年の森林美学初版の出版前の10年間は、彼は審美を重視する林業家として経験を積んだのでした。彼の父の死後、ハインリッヒは665haの森林を含む領地を相続しました。1888年には、ポステルの北約1kmに位置するポス



地図1

南西部ポーランドの地図で、著者ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュの生地であり、メリチュの南西部9kmに位置する。

テルーカルミン(ポストリンーカルミン)の隣地を購入しました。1893年には、彼は帝国議会 Reichstag のメンバーになり、1902年の第2版を著すまで、その地位にいました。そして、1911年に第3版を著しました。

彼は1920年に死去しましたが、村の墓地とは離れた場所に埋葬されました。彼の妻、ズザンナ Susanna は1926年に亡くなり、同じ墓標を分け合っています。その領地の最後の持ち主は、1945年の時点では、ルドルフ・フォン・ザーリッシュ Rudolf von Salisch で、恐らく息子が孫か、甥でした。



写真 1

「14世紀の第2期にオレスニキツヒ侯によって建設されたゴシック式城郭の廃墟。
[ボヘミア宗教改革者]フスの戦いの間に、城郭は建設されました。これは16世紀
に再建され、ルネッサンス様式を取り込みました。1797年に一部焼失し、それ以降、
放置されました。城郭は堀に囲まれ、中庭は蔭にありました。」この文章は城郭にか
かれたサインを[合衆国]アテنزにあるジョージア大学大学院のポーランド系学
生、ジャセク・シリイが訳しました。

19世紀後半と20世紀初頭は、シレジアの封建社会の最後の面影を示して
いました。プロイセンの貴族とは、代々同じ土地を所有してきた多くのプロシア
貴族で、ドイツ人やポーランド人の農民にとっては領主でした。その土地はも
ともとポーランド人が定住していましたが(西暦800年ころ)、数世紀に涉って
ゲルマン民族が東へ移動し、その場所にいたスラブ系民族と入植地を造って
いきました。そして、それぞれのグループは独自の文化を形成していきました。
農業衰退の時期毎に土地が放棄され、富裕な地主層へ組み込まれていきました。
かくしてユンカー層 Junkersとして知られる土地富裕層が形成されていったの
です。土地を失った農民達は貴族のために働く農奴になりました。

この間に、政治権力はポーランドからポーランド・リトアニア、オーストリア、
そしてプロシアへ、なお、ナポレオン戦争の短い期間はフランスに、それ
ぞれ帰属しました。ミリチュにある城は14世紀に建てられ崩壊して再建され

ましたが、1795年に再び崩壊しました(写真1)。それは中央ヨーロッパの権力者の間で繰り返行われた戦争の証拠でしょう。それ以降、ポーランドは独立国家としての存立が終わり、300万人のポーランド人はゲルマン人の管理下に置かれていましたが、独自の文化、言語、そしてローマ・カソリックの信仰を保ちつつも、プロシアとロシアによって分割されました。

ルドルフ・フォン・ザーリッシュは典型的なユンカーでした。ポステルの領地は数百haにのぼる森林を含んでいました(著者は2つの数字を出しました。1000ha以下と665haですが、彼の借地人によって耕された農耕地や牧草地の面積については何も語られていません)。ハインリッヒはポステル-カルミンを購入しさらに入手して追加しましたが、それには農地と森林の面積が解らない土地も含まれています。第一次世界大戦後、ポーランドは独立国家として再生しましたが、国境はポステルとミリチェの北わずか数キロの所に引かれました。フォン・ザーリッシュ一家はポステルに残ったと言うこと以外、戦後のその領地に関する事は解りません。

ドイツがポーランドに侵入して始まった第2次世界大戦は、表面上はポーランドに生活するドイツ民族の再統合ですが、西チェコスロバキアがその1年前に支配された時と同じ理由でした。1944～45年の戦争の時にもどると、ロシアの軍勢がポステル地方へ侵入し、フォン・ザーリッシュの邸宅は均等に分割されました。分割に係わった1名は、表向きは、(ドイツ)空軍パイロットだったそうです。彼らは明確な理由無く、地域の校舎を破壊し、パン屋を焼きました。*
ポストリン-カルミンの邸宅は、そこが放棄され、とても悪い状態にあったにもかかわらず(写真2)、破壊されずに残りました。そこには、4インチサイズのシラカンバが壁の外に生育しており、床が部分的に崩れ落ち、屋根は貧相な状態ですが、壁はそれでも残っています。このために見る人はその美しい状態を想像することが出来ます。そして増築部分は、ポストリン地方の崩れた邸宅の外観をさらしています。

戦争の終わりが来て、ポーランド人は、ウクライナとの国境の東側、ドイツとの国境への西側、オーダーOdra(Oder)川とその支流のニサNysa(Niesse)川

* この情報は私が1993年9月にポストリンを訪れたときに、マレック・グラベニィ森林官を翻訳者として介した現地の名も知らぬ住民との世間話からもたらされました。



写真2

ポストリン＝カルミンのくずれた邸宅(荘園)、ポストリンから約1km離れ、著者フォン・ザーリッシュによって一度は所有されていました。

に沿った現在の場所へ移っていきました。シレジアのすべては、ポーランドのシロンスクSlaskとなりました。そして多くのドイツ人住民は、彼らの多くは前の世紀からそこに住んでいましたが、国境の西側へ再移動しました。ロウロLwow(Lvov)とブリーストBriest(Brest)の東部地域、そこは、ウクライナへ割譲されたのですが(そして、そこはソビエト社会主義共和国の一部です)、その場所のポーランド人はシロンスクへ移動させられました。その場所は、今や13世紀以来どの時代よりも民族的にはより純粋です。

フォン・ザーリッシュの所有地は、多くの新しいポーランド人によって分けられました。しかし、森林は先のプロシア国の森林と合併され、新たにポーランドの森林官によって国有林としてミリチュにて管理されていますが、そこは、かつてドイツの森林官によって利用されていたものです。ポストリンとポストリン＝カルミンの邸宅の場所とそれぞれの庭園は、ミリチュ森林管理署によって維持されています。森林官のエヴァルト・ラノスチェックは2つの場所を変えました。つまり、ポストリン公園の5.2haの図化と目録を作成し、注目すべ



写真3

ポストリンにあるフォン・ザーリッシュ公園への入り口の印(地図上の交差点)、彼は、ミリチュエ管理署からポーランド人の林業家から選ばれたのです。番号の付いた樹木にはポーランド語とラテン語の名前が付けられています。

き樹木の種名と位置を示すボードを入りに設置しました(写真3)。自然の流れの中で森林空間、建物の場所、そして路の大部分が改善されていきましたが、多くの樹木は、ハインリッヒと彼の父によって最も良い条件に植えられました(写真4)。

木製のラベルは朽ちて見あたらなくなりましたが、ラノスチェック氏は公園の中で最も高い木のダグラスファー *Pseudotsuga menziesii* を、また最も太い木の欧州ハンノキ *Alnus glutinosa*、これは直径122cmを越えるのですが、それぞれを区別してみせました。並木、これはフォン・ザーリッシュが歩いた村から邸宅までの路に植えられていましたが、見分けがつかなくなっています。残っている元々あった木の中で、イングリッシュオーク *Quercus robur* とムラサキブナ *Fagus sylvatica* var. *purpurea* は大きさと美しい形を示すことによって、もっとも印象的です。シデ *Carpinus betulus* は何年も前に芯を止められた様子



写真4

ポストリンにある公園の中に生育するピラミッド型オーク (*Quercus robur fastigiata*)

が見えました(写真5)。驚いたのはイトスギ *Taxodium distichum* でした。この公園は北緯51度、ユーラシア大陸の寒い中緯度地帯に位置します。しかし、この樹種は、本来、合衆国南部の暖かな湿地に生育するのです。

フォン・ザーリッシュとその父によって、種数と多様性は確保できたのですが、自然繁殖は驚くほどなされていません。卓越した樹種としては、シナノキ *Tilia* 属(ほぼ全ての個体が古くから繁殖しており、成木サイズになっています)、ニセアカシアとプラタナス、これらの樹種は葉が赤い変種です。他に



写真5

ポストリンの公園にあるシデ(*Carpinus betulus*)

記述すべき樹種としては、サクラ *Prunus serotina*、カエデ類 *Acer campestre*, *Acer platanoides*、ニレ *Ulmus laevis* そしてブナ *Fagus sylvatica* です。多くの下層植生は灌木類で、ニワトコ *Sambucus* sp.、ナナカマド *Sorbus* sp.、クマツヅラ *Callicarpa* sp. などが占めます。多くの耐陰性の高い樹種があたかも在来種のように見える中で、針葉樹の中で唯一繁殖しているのは、イチイ *Taxus baccata* です。著者であるフォン・ザーリッシュが嬉しく思ったのは、彼の好きな植物の一つであるツタ *Hedera helix* は、きわめて上手く育っていて、足の踏み場もないくらい広い面積を被っており、まるで刈り込んだ生垣のように生育し(写真6)、オークの木にからみついて登っており、直径は約10cmに達していたことです。フォン・ザーリッシュによって植えられた木のある他の場所ですが、ポストリン-カルミンも含み、そして家族の墓地のある場所には、いくつかの大きなボンデローザ・パイン *Pinus ponderosa* が見られました。

草ぼうぼうの公園の光景、緑の藻に覆われた池と、かつては美しい宮殿であった瓦礫の山は、いくばくか気を減入させます。とはいえ、種の多様性は植物園のような特色を呈していますが(ミリチュの林業技術学校の生徒はおそ



写真6

ヤマアラシ *Erinaceus europaeus* が、ポストリンの公園にあるツタ *Hedera helix* の茂みに身を隠そうとしています。

らくそのために利用しています)。これは驚くことではなく、戦争の狂暴性と、放棄された場所をも再生する自然の厳しさが生み出したものです。1849年から1850年にかけてルドルフ・フォン・ザーリッシュによって建てられ、彼の妻(ハインリッヒの母親)から名を取られた石造りの狩猟用の塔は、今なお立っています。あのヨハンナの塔 Johanna's Height を見ることは確かに心をうち、喜びでした(218頁、図42)。この塔は射撃術の指導、あるいは一般的な監視などに使われたと人々は推測してきたでしょうし、敵にとっては、おまな標的であったことでしょう。この塔はあらゆる戦争でも、損なわれずに残ったのですが、ついに、1940年代後半の火災で、その木製の内部が全焼してしまいました。ポーランドの森林官達はそれを美しく修復し、5m高くして火災の見張り所と宿泊所(写真7)として利用しました。塔への道の合流点にはポステルにあるものと同じ型で、塔の歴史を伝える看板を立てました。その道に沿った美しい150年生のブナ林は、フォン・ザーリッシュが、彼のいわゆるポステル間伐法 Postel thinning method(186頁、写真Ⅷ)を実施した林分と同じです。彼の間



写真7

フォン・ザーリッシュの父親が1850年に建設し、ミリチュの森林官達が修復したヨハンナの塔Johanna's Height(狩猟の塔)

伐の目的は下層植生のブナの発達を促すことによって、林分が“透けていくこと”を防ぐことでした。しかし、今日ではその林床は、堂々とした高さには達した成熟したブナの高い林冠の下で、下層植生は存在していません(写真8)。

森林官マレック・グラベニィ氏に案内された、さきのカソリック・ハンマー森林Katholisch-Hammer Forestの見学では、ほとんど物理的な変化は見られませんでした。私たちは、各々の区画*Jagen*と防火帯*Gestel*、同じく区画を通り抜ける道路が表示された戦前のドイツの地形図に従っています(地図2)。その区画と防火帯と道路は、時が止まっていたかのように、今なおそこにありました。区画の角には四角い花崗岩の位置標識さえも、変わることなく交差点の北東側という正しい位置にありました。ポーランドの森林官らは、単に区画の



写真8

ポーランド山林省の命令によって、ヨハンナの塔を囲むこの150年生のブナ *Fagus sylvatica* の24haの林分は、公共保留地に定められています。この林分は、恐らくフォン・ザーリッシュが「ポステル間伐法」を実践した場所のようです。



写真9

かつてはカソリック・ハンマー州有林地区であったラゾビス森林において、4つの区画の境界線の交差点にある花崗岩でできた位置標識。



地図 2

著者の邸宅、公園、村、ポーランドとその周辺のドイツ地図(c. 1928)は、それを取り囲む森林と、カソリック・ハンマー森林を含めて、隣接する州有林の場所を示します。矢印は区画88、89、116、117の交差点を指します。図28、29、142頁、143頁、写真9、10を見て下さい。

番号を変更しただけだったので(写真9)。私たちは、著者がパラディス(145頁、152頁)として参照した区画139、140と、ピッケルの温ビール Pickel's Warm Beer(146頁)と呼ばれる区画149とを、まず調べました。これらの名称



写真 10

106年目で伐採されつつある区画 89(ドイツの番号)。欧州アカマツ *Pinus sylvestica* は図 28 に示された皆伐後に植栽された樹木と恐らく同じものです。この 2 枚の写真は同じ位置から撮影したもののなのです。

は、番号に加えて地形図にも載っていました。しかし、それらの場所については、名称を説明する目立ったものは何も見つけられませんでした。

そうして私たちは区画 88、89、116、117 の交差点へ向いました。142 頁の図 28 の写真はこの交差点から撮影したもので、樹齢 100 年の樹木は決められた伐期齢に達し、区画 89 は伐採段階に入っていることを示します。1993 年、その区画は再び伐採されつつありました(写真 10)。伐り株の年輪はほぼ 106 年でした。それらの欧州アカマツは、142 頁の写真に示された皆伐に引き続いて植栽されたものと、まるきり同じものでしょう。

トラッヘンベルク Trachenberg 線にある近くの村、クライン・ユシュッツ Klein Ujeschuetz やフォン・ザーリッシュが 209 頁で言及した大防火帯を訪問して、私たちの調査を終えました。私たちはトラッヘンベルク線にある森林官のプライベートなプロットに境界をなす“イトスギの形状をしたセイヨウネズ”の痕跡を捜しました。でもセイヨウネズは発見されず、森林官の住宅の場所は瓦礫の山でした。

このプレビューでは表示されないページがあります。

初版への前書き

フォン・ザーリッシュ

森林美学を著すという偉大なる仕事に相応しいのは次のような人物です。林業の豊富な知識を備えているべきであり、美についての哲学的な教説を心得ており、物事に対する情熱と実行力を備え、広大な場所において自らの考えを実践し、その試みの成功によって、その正当性を検証する十分な機会と時間を持ち合わせていなければなりません。そして、結局、十分な時間があっても、誰もが必ずしも好むことではないと思えますが、書くことが好きな人物であることです。

私自身は、森林官指導者試験を目前にして行政の経歴を退き、その後、田舎に暮らし、どのような学術的生活からも離れているため、新しく習ったこと以上に忘れました。私自身の経験は限られていますが、1000haたらずの場所で、森林美学の実践を行ってから約10年に満たないため、森林美学を書き表す仕事に情熱を十分に持ち合わせているかどうか定かではありません。

また、私の本には多くの長所と欠点があると思います。しかし、このようなことは私の執筆の妨げにはなりません。それは、この本が森林美学の唯一の著書だからです。

私は初めに当たって、このことを、そして、ここに最後として述べますが、私が使わねばならない控えめな文脈はやめます。例えば、このような言い回し、“私の控えめな言い回しでは”あるいは“もし私がNN氏、定評のある権威者であるNN氏の意見に対して敢えて反対を言うことが許されるなら”などです。

私が本書で議論しようとすることは、わずかに新しいのですが、ここで用いた理念の多くは巻末の文献に既に述べられています。いくつかは、あちらこちらで既に実行に移されています。いずれにせよ、いくつかは読者にとって新しいことであることを願います。なんにせよ、この広く分散した文献資料を集めることによる功績は、重要な考え方の出発点であり、私の実践に基づきますが、森林科学の一分野とし森林美学を創始したことにであると主張します。

ミリチュ近傍ポステル 1885年1月

*187頁において提案した間伐に対する意見は恐らく新しい見解を含むでしょう。

第2版への前書き

フォン・ザーリッシュ

初版が出版されてから15年がたち、絶版になってからも時間が経ちました。森林美学は全面的に書き直され、版を大きくして再び出版されました。もし、この版でも明らかな欠落があり、大切な部分が少ししか含まされていないとしたら、どうかお許し下さい。私は様々な仕事に就いていますが、特に1893年からの議会の仕事によって多忙を極めてきたため、私が楽しみにしている林業に、ある時は全力では打ち込むことが出来ませんでした。

森林美学が林業学校において講じられ、専門家によってこの分野の知識に注意が払われ、また推進されるため時間を要しないことを願います。この間、私は皆さんの研究に資するため、文献の拡充に特に注意を払ってきました。適切な本として、ルドルフRudorffやエルンストErnstの郷土保護Local Preservation(ライプチヒとベルリン、1901年)、出版社ゲオルグ・ハインリッヒ・メイヤーGeorg Heinrich Meyer、を挙げましょう。この適切な考察の宝庫を知ったのは、私が改訂作業を終えた直後であったのです。

このことは、ゾーンレイSohnreyの著書“農村の福祉活動と郷土管理の手引き*Guide for Rural Welfare Work and Local Maintenance*”(ベルリン、1901)についても同様です。私が、森林の社会的意義に関する優れたこの内容を知ったのは、原稿を出版社に送ったその後でした。

森林美学を読む時間やあるいは情熱のない林業家でも、森林整備に際して、森林美学の判断を時折聞くことでしょう。可能な限りの注意をはらう指針がそこにはあります。望むことは、この版がしばしば取り上げられ無駄にならないことを願います。

出版社の厚意によって、この版では、本の装丁だけではなく、マイゼンバッハ・リファルスMeisenbach・Riffarth社(ベルリン・シェーンベルク)の美を備えた沢山の写真が充実し、また、これらによって意味するところを明確にしてくれるでしょう。

ポステル 1902年1月

第1部 森林美学の基礎理念

セクションA:序章

第1章 森林美学の用語と役割、森林科学の特殊分野としての森林美学の歴史と文献—研究の必要性—

1. 森林美学とは何か

森林美学は施業林 timber forest の美の学問です。森林の美がどこにあるのか、森林の美をどのように育てるのかを示すものであると考えられています。

本書では、美的観点で行われる林業経営を林業芸術 forestry art と呼びます。林業芸術は、土地を人間の美しい居住の場へと改変することを目的としたランドスケープ芸術 landscape art [der Landvershoenerkunst] の一部門で、そのランドスケープ芸術は、土地の一般的な耕作芸術 general cultural art の一部門です。

本著では、これらの定義に関して、美学者カール・クリスチャン・フリードリッヒ・クラウゼ Karl Christian Friedrich Krause の著書“ランドスケープ芸術の科学 *The Science of Landscape Art*”に従います。この書籍は1832年に執筆され、ようやく1883年になってから出版されたものです。

クラウゼによれば、ランドスケープ芸術はいくつかの部分、すなわち、建物の芸術 the art of building (建築 architecture)、造園芸術 the art of gardening、森林芸術 the art of forest cultivation、畑地芸術 the art of crop cultivation、草地芸術 the art of meadow cultivation から成り立っています。その一方で、クラウゼは農村の最高の美しい装飾となるものは、健康で、剛健で、美しく、幸せな人々であるとも考えています。

森林芸術について、クラウゼは“森林芸術に関して言えば、その主要な課題は、実用のためにも、美と喜びのためにも、**林木と灌木類を植え育てること**、

このプレビューでは表示されないページがあります。

セクションB:自然の美³⁴⁾

第1章 自然美 Natural Beauty と芸術美 Artistic Beauty の関係に関する 基本的見解

他の職業の人々より野外で過ごすことの多い私たち森林官 forester にとって、自然美 natural beauty は特別に重要なものであり、私たちは自然美という豊かな財産を護り、手入れしていかなくてはなりません。

一般の人は自然が美しいことを自明なものと認め、春には愛をもって熱狂して詩をあふれさせていますが、哲学者達は、どのように、どれだけ、美しいものとして自然を考えることが、自分たちに許されているのかについて気づきません。

例えば、(私がツァイジング Zeising にしたがって判断した場合)、ヘーゲル Hegel は自然の内にある美しさの存在を知りませんでした。彼にとっては、芸術的美しさ artistically beautiful だけが、いわゆる“美しさ”として正当でした。自然に対する感覚を何度も立証したシラー Schiller でさえ、哲学的に考察し始めるやいなや、そのような自分自身を否定します。彼は評論“崇高について on the sublime”の中で次のように主張しようと考えます。

“さて、自然自体が美しさと崇高さを生み出す膨大な資質を備えています。しかし、他の場合と同じように、人は直接的より間接的に受け入れやすく、自然が一斉に動き出す春に苦勞して辛い思いをして探し出すよりも、芸術から準備され、選び抜かれた材料を受け取ることを好みます。”

ヘルマン Hermann³⁵⁾は、これらの問題をより明確に論じています。

“言ってみれば、芸術のすべての内容は自然の中に表われ、前もって作られているのです。つまり自然は、芸術によって捻出されるか、示される方法で本物の事物すべてを創造することを望んできたのです。言うならば、芸術作品の中身あるいは本質を作り上げている自然自体の美の基本的な観念があります。その結果、芸術作品には常に真実や客観性が存在し、そして、芸術の主要な価

このプレビューでは表示されないページがあります。



I 岩石、石、土砂を運ぶ急流

写真はベルリンの画商 Ed.Schulte から入手。カール・ハッシュKarl Hasch(ウィーンにて1897年没)によって、Oetzal のUmhausen近くのStuiben Falls に至る途中の風景が描かれた。

このプレビューでは表示されないページがあります。



Ⅱ スザンナオーク

ポステルの教員ヴァスドルフ Wassdorff氏撮影。胸高直径は185～202cm、周囲長は6.73m。このスザンナオークは、ポステルにあるKaelberwinkelの境界で保存されている標準的な樹木。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第2部 森林美学の応用

セクションA：森林造成と森林経済

第1章 最適な土地利用 Soil Use の決定

森林局 Forest Organization [旧森林造成局] や森林作業を請け負う民間企業が頭に入れておかなければならない最も重要な問題は、土地の最適な利用法は何かということです。すなわち、**現在の森林地域**を、現状の面積のまま維持すべきか、**拡大すべきか**、**縮小すべきか**、**あるいは分割すべきか**、ということです。この問題は、はるか昔から議論されており、全く異なる方法で様々な答えや提案が出されてきましたが、現在、再び関心の的となっています。社会派の政治家たちはこの問題を頻繁に取り上げてきました。この問題に対して、E. M. アルント E. M. Arndt がいかにはっきりと自己の主張を示していたかは、ご存知の方もおられるのではないのでしょうか。彼は以下のように記しています⁽⁶⁹⁾。

“森林官や他の立派な人々が、森林に棲む野生動物や家畜小屋の動物たち、シカ deer やノロジカ roe、イノシシ hogs、ウマやロバ donkeys、そして雄ウシ oxen たちの代弁者となってきました。また彼らは、森林や牧場、フェンスで囲まれた土地をどのように配置・管理すれば、そこに棲む野生動物や家畜が健康に成長し、かつ彼らの優れた血統や特徴を損なわずに済むかについても論じてきました。では、こうした議論の焦点から取り残された哀れな人間のためには、どのように大地を囲い、木を植え管理すればよいのかと私はかつて考えたものです。私は考えるのではなくそれを感じて、どこに足を踏み入れてもそれは——私は野暮な表現を使っているわけではありません——鼻につき、目に飛び込んできたのです……ですから古いドイツの木立は常にそこになくってはならないものであり、再生されるべきものなのです。それでこそ、どこにおいてもド

このプレビューでは表示されないページがあります。



Ⅲ ネジゴード動物園 Nesigode Zoo内の島にあるハンノキ

ヴァスドルフ Wassdorff氏撮影。いわゆるルーゲLugeと呼ばれるものには、おびただしい数のこのような島があり、それらは浮島とも呼ばれるでしょう。このような島はハンノキの根が地面とつながっているだけなので、強風によってゆらゆらと揺れます。

このプレビューでは表示されないページがあります。



Ⅳ ポステルのダンケルマン通り

ヴァスドルフ Wassdorff 氏撮影。背景の防火帯が徐々に狭くなることによって、遠近感が増している。

このプレビューでは表示されないページがあります。



V ポステルの保残木作業のマツ林の下生え

ブレスロウBreslau在住の美術教員ベルツPeltz氏撮影。この写真は、規則的に(均等に)枝打ちされた標準的なマツを示しており、これらのマツは区画52という1グループとして管理されている。

このプレビューでは表示されないページがあります。



Ⅵ ポステルにある、枝を短く刈り込まれたヤナギの老木
(ヴァスドルフ Wassdorff 氏撮影)

このプレビューでは表示されないページがあります。



Ⅶ ポステルにある、前更更新されたオークの一群とマツの立木(保護木)

ヴァスドルフ Wassdorff 氏撮影。この写真は、区画 56a の「長い列」の西側で更新した樹木の一群を示している。20 年ほどの間にこの区画に侵入してきた樹木を除去することによって、幹の中間部分が開放的になり、種子から育った若いオークの成長に好ましい条件となった。そのため、スプルースが保護木として植林された。

このプレビューでは表示されないページがあります。

刈り込まれた生垣よりも、もっと美しいものとなりうるのは、クライン・ウジェシュツ Klein-Ujeschuetzにある森林官の個人敷地(カソリック・ハンマー Katholish-Hammer 森林地域の主任)の縁取りです。そこには、非常に壮大な糸杉の形のセイヨウネズ junipers がトラッヘンベルク通り Trachenberger-Line に沿って林立しています。しかし、この絵のような生垣は、多くの空間を取ります。

セクションB: 美への関心に基礎を置く森林の装飾

第1章 公園か森林か

私は森林を公園 park にするという望みのために、称賛されるのと同じくらい非難もされてきました。私がいつもこのような批評を非難と見る傾向にあったのは、時として必要悪であるにも関わらず、公園をほとんど悪とみなしてきたためです。公園の中にいると、広い区域が実用性を失っているという考えによって、当惑させられます。利益や利潤の匂いが何も感じられない場所で休息したいと思う人が時々いることを私は重要視しますが、一方で、そこでは、人がかろうじて生活できるすがすがしい、少しもあるいは全くない、と言わざるを得ない広大な公園を持つことを好みません。全く反対に、公園は注意深く、費用をかけて維持管理する必要があります。維持管理を怠れば、公園は正当な非難の原因となります。また、費用を考慮しないのであれば、**大きな森の近くに公園を配置することは、ほとんどありません。**ピュックラー侯 Prince Pueckler がムスカウ Muskou の近くで見つけた、森林の質が低くないところでは、よく手入れされた庭と森林が、公園が媒介して接続する連結なしに隣接して配置されおり、**互いの区域を最もよく見せるでしょう。**森林を直接、庭まで延長することができなければ、風や日射から庇護された関係は、公園風の景観によって成立させることができるでしょう。

林業に関する論文の中で、この方法で人々を満足させるか、または他の必要性を満たすために、**森林の一部を公園のように取り扱うことがしばしば提案**されます。

このプレビューでは表示されないページがあります。



Ⅷ ポステルにおけるポステル間伐法 Postel thinning method を施されたブナ林
ヴァスドルフ Wassdorff 氏撮影。写真に写っている2、3cm強で下層植生を形成
する細い幹は、主要木であるブナとほぼ同齢である(この写真は、ヨハンナの塔
Johanna's Height とダックスベルグ Dachsberg の間にある最も古い実験林の一つ。

の場所においても、混交林分や林分の成立のためと同様に林分管理の規則のため
に個々の植栽によって装飾された林分について、上述のような考え方を一つの
指針として要求することが求められます。

このプレビューでは表示されないページがあります。



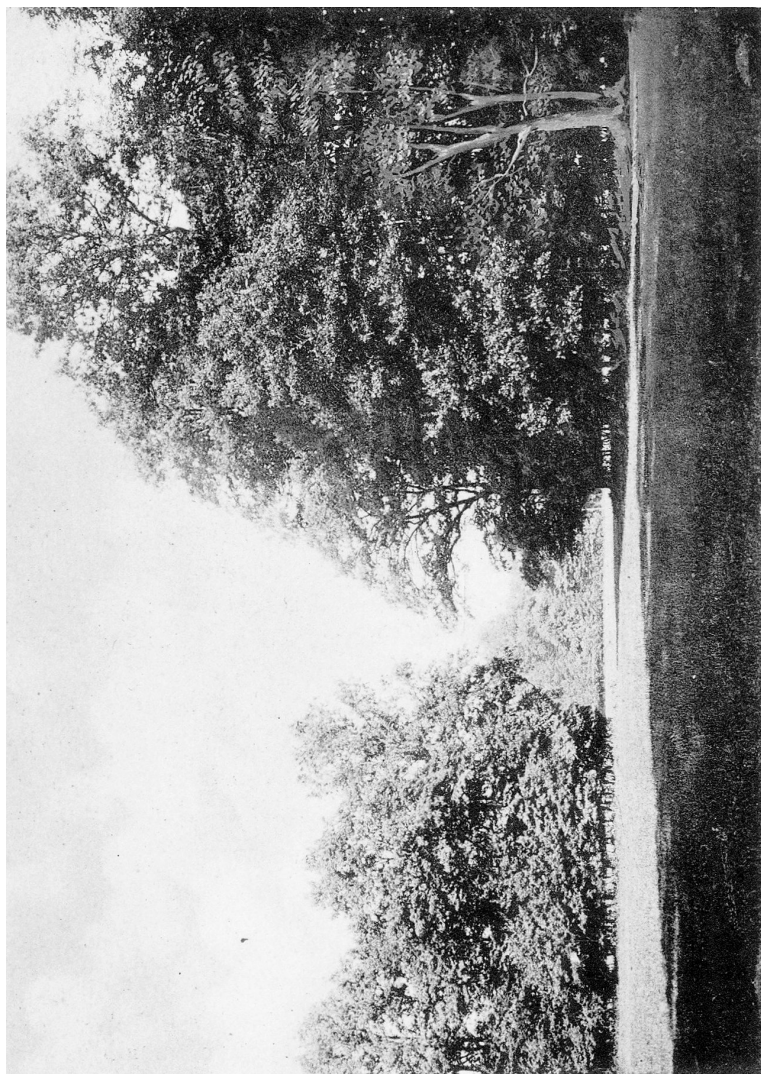
Ⅸ ミリチュ道にあるオーク

ヴァスドルフ Wassdorff 氏撮影。このオークは1877年に若い苗木の状態で植林され、それ以降23年間、剪定によって整えられてきた。

です。

これらの原則は、全ての樹種に通用します。

このプレビューでは表示されないページがあります。



X オーラウ Ohlauの近くにある皇太子の所有林、ワイネルトーメドウス Weinert-Meadows

オーラウのJ. Volpert氏撮影(出典は、「Bunte Bilder aus dem Schlesierlande (Colorful Pictures out of Silesian Land: シレジア地方の色彩鮮やかな写真)」、出版はSilesian Pestalozzi-Society, Breslau, 1898)。写真は美しい景色と様々な形態の林縁を表している。

このプレビューでは表示されないページがあります。



XI ネジゴード動物園 Nesigoder zooの人工ダムの縁

ヴァスドルフ Wassdorff氏撮影。この写真は、写真IIIで示した島の領域にある浮島 Lugeを示している。岸にはハンノキが育っているのがわかる。このハンノキは小川の流れる方向を決定している。

このプレビューでは表示されないページがあります。



Ⅷ クラッツカウKratzkauにある開放的な景観

森林研修員時代のフォン・ザーリッシユ撮影。この写真は、レンネLenneの計画に従って立木や寄せ植えで装飾された城の牧草地を表す。中央にはオークが植わっているが、これはモルトケ伯爵Count Moltkeからの助言に従って刈り込まれている；以前は低く刈り込まれ、公道との境界線の役割を果たしていたサンザシhawthorneの生垣に続いて、冬の景色に色を添えるためのミズミズキ *Cornus alba* の一群が植えられていた。

このプレビューでは表示されないページがあります。



XII ポステルにある村の共有牧草地に生育する野生の西洋ナシの木
ヴァスドルフ Wassdorff 氏撮影。この写真は霜で飾られた樹木を表している。写真を撮ったのと反対側の樹木の側にはベンチが置いてあり、学校に通う子供たちが樹冠の下に集まって来やすいようにしてある。

このプレビューでは表示されないページがあります。



XV ベルリン動物園 Berlin Zooの花広場 Flora-Placeにある並木
ベルリン在住の宮廷写真家 Braatz 氏撮影。この写真は並木道を遮るように植えられている刈り込まれたイチイである。

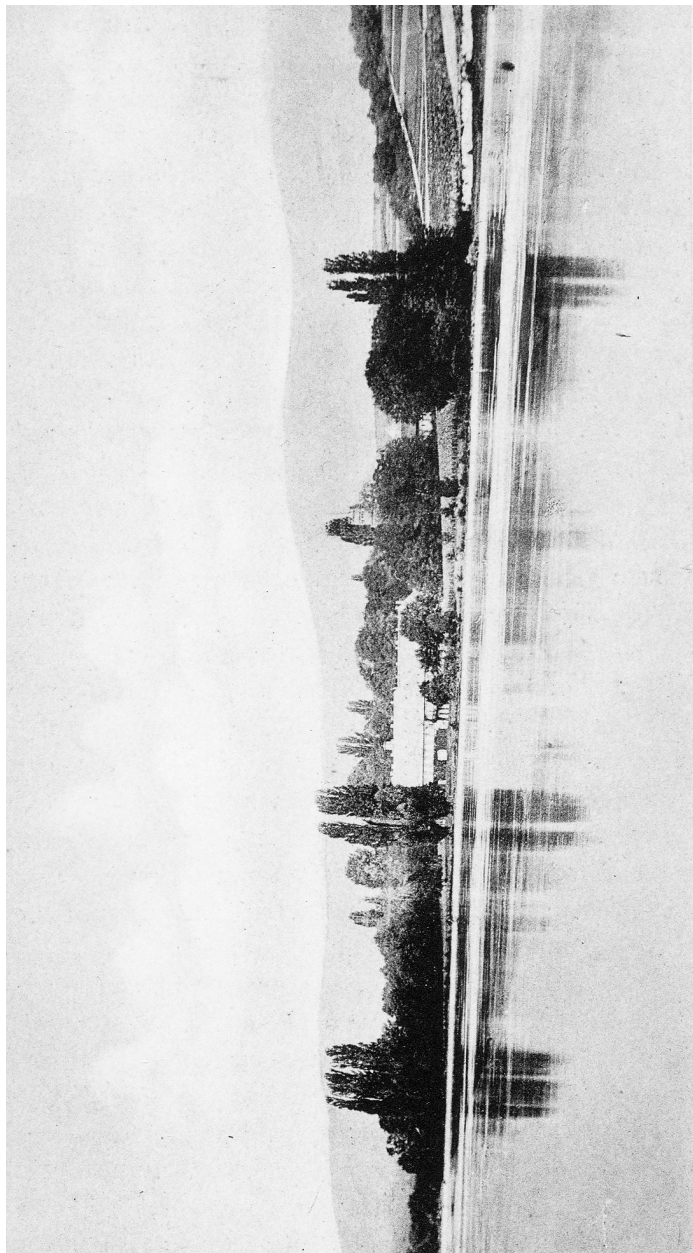
このプレビューでは表示されないページがあります。



XV ポステルにあるエミリーブナ Emily-Beech

ヴァスドルフ Wassdorff 氏撮影。この写真は樹冠の広い樹木が高林においてその特徴がわかりにくくなっている様子を表している。なぜなら、低い枝が成長のよい若い樹木によって覆われてしまっているからである。

このプレビューでは表示されないページがあります。



XVI ライヒャルツハウゼン Reichhartshausen にある Moenchsau 島からのライン川の渓谷の景色

写真はDR. Jur. Wilhelmjが私にくれたもので、Bad Oeynhausen 在住の宮廷写真家C. Colbergの撮影。この写真はピラミッド型の樹木が一群で植えられていないと見えればならず、それらの樹木群が氷辺や丘にあると特によく見えることを証明しているものである。

このプレビューでは表示されないページがあります。

付 録

引用文献

引用文献を掲載する前に、本書を記すための情報を口頭や文書で提供してくださった方々に感謝の意を表します。ベルリン在住の教授であり Royal Oberkonsistorialrat でもあるクライネルト博士 Dr. Kleinert は初版の執筆中から、一般的なことについての助言をくださいました。現在ベルリンの主席森林官であるフォン・ボーンステッド von Bornstedt 氏は文献の引用方法やその他の有益な助言で私を支えてくださいました。第2版では、王族の主任森林官(前カソリック・ハンマー地区、現在は Jellowa 地区の森林官)であるローディグ Rodig 氏は、非常に価値ある助言をくださいました。

第1部セクションA

第1章

1 節に関して

1) 5 と 6 頁. Krause “Landverschoenerkunst” [The Science of Landscape Art], Dr. Hohlfeld and Dr. Wunsche 編, Otto Schulze, Leipzig (現在は Emil Felber, Berlin) が出版. その他に、Krause, “Vorlesungen ueber Aesthetik” [Lectures on Aesthetics] および “System der Aesthetik” [System of Aesthetics], Leipzig, 1882 も参考にした。

2) 6 頁. Dr. K. E. Schneider, “Die schoene Gartenkunst” [The Beautiful Art of Landscape Gardening], Stuttgart, 1882, “Ein Gaertner als Aesthetiker” [A Gardener as Aesthetician], Dresden, 1884.

3) 7 頁. Vischer, “Aesthetik Teil II, Die Lehre vom Naturschoenen” [Aesthetics Part II, The Teaching of Beauty in Nature], Leipzig, 1847.

2 節に関して

4) 7 と 8 頁. Krause “Vorlesungen” [Lectures], p. 187.

5) 8 頁. G. Heyer, “Supplement zur Allgemeinen Forest und Jagd zeitung X” [Supplement to the General Forest and Hunting Journal], p.26.

このプレビューでは表示されないページがあります。

索引

索引は和訳時に「人名」と「一般項目」の区分を加えた。

人 名	
アルトウム Altum	39
アルント E. M. Arndt, E. M.	119
イエガー (宮廷庭師) Jaeger (Court gardener)	78
ヴァイゼ Weise	210
ヴァング, F Wang, F	57
ヴィラモヴィッツ - メレンドルフ伯爵 Wilamowitz-Moellendorf, Count von	266
ヴィルドウンゲン Wildungen, von	168, 236
ヴィルブランド Wilbrand	17, 164, 171, 215, 258, 290
エーバーマイヤー Ebermeyer	194
エールシュテット Oersted	21, 64
ガイヤー Gayer	16
ギルピン Gilpin	15, 69, 77, 112, 139, 162, 291
グーゼ Guse	9
グーテンベルク Guttenberg, von	18, 140, 150
クラウゼ Krause	18
クラフト Kraft	18
クロプシュトック Klopstock	115
クワェト・ファスレム Quaet-faslem	149
ゲーテ Goethe	6, 22, 62, 216
ケーニツヒ, G Koenig, G	16, 249, 251, 259
ケスラー Kessler	90, 122
コッタ Cotta	124
シーマン Schiemann	235
シュナイダー, K. E. Schneider, Dr. K. E.	6
シュバルツ, G. Schwarz, G.	308
シュライデン Schleiden	16, 117, 121, 150
シラー Schiller	36, 57
ゼレンカ Selenka	30, 63
ダーウィン Darwin	18
ダンケルマン Danckelmann	154
デンツイン Denzin	10
ドマズビスキー Domaszewski, von	57
ナイ Ney	187
ナイマイスター Neumeister	130, 170, 238
ハーゲン Hagen, von	176
バイスナー Beissner	93
ハイヤー, G. Heyer	8, 94
ハルティッヒ, Th. Hartig, Theodor	20
ハルティッヒ, G. L. Hartig, Georg Ludwig	70, 71, 180
ハルティヒ, R. Hartig, Robert	175, 252, 267
ハンベル Hampel	18, 181
ピュックラー侯 Pueckler	16, 109, 153, 156, 180, 208, 209, 212, 220, 268, 284
フィッケルト Fickert	254
フィッシャー Vischer	7, 76
フィッシュバッハ Fischbach, von	18
フェヒナー Fechner	26, 145
プファイル Pfeil	11, 173
プブリウス・ウェルギリウス・マル Virgil	67
ブラトラネック Bratranek	77, 114, 264
フリードリヒ・ヴィルヘルム IV 世 King Friedrich Wilhelm IV	225, 254, 280

このプレビューでは表示されないページがあります。

アメリカにおける森林美学の展開

伊藤 太一

1. はじめに

フォン・ザーリッシュが引用しているように、彼の“森林美学”より百年ほど前の1792年にイギリスではギルピン(William Gilpin, 1724～1804)が“森林風景に関する所見 *Remarks on forest scenery and other woodlands views*”を著している。英語であるためこちらの方がアメリカ人に大きな影響を与えている。特にニューヨークのセントラルパークをデザインし1865年にはヨセミテ渓谷計画案を策定したオルムステッド一世(Frederic Law Olmsted, Sr., 1822～1903)は、若い頃イギリスに渡りギルピンやラスキン(John Ruskin, 1819～1900)の文献で学んでいる。また、1854年の“ウォールデン *Walden*”において、森林の生態だけでなく森林美についても多様な記述を残しているソロー(Henry David Thoreau, 1817～1862)も、その中でギルピンを引用している。

他方で、フォン・ザーリッシュが本書の初版を出版した1885年前後には、開拓前線であるフロンティアの消滅に代表されるように、アメリカの自然地域に対する人びとの意識には大きな変化が起きていた。未開地が文明化の障害物から保護すべき空間となり、具体的には連邦政府や州政府による保護地域が設定されはじめた。オルムステッド一世が計画策定に関わった1864年のヨセミテ渓谷の州立公園化を参考として1872年には世界最初の国立公園としてイエローストンが成立し、1885年にはニューヨーク州がアディロンダックに州保存林(forest preserve)を設定した。さらに、1891年には国有林の前身となる保留林(forest reserve)が制定されている。すなわち、国立公園、保存林、国有林という3つの異なる目的を有する保護地域がアメリカに誕生した時代である。いずれも自然地域を対象とするが、あるべき状態で固定する狭義の保護“プロテクション(Protection)”、自然のプロセスに委ねる保存“プリザベーション(Preservation)”、持続生産を目指す保全“コンサベーション(Conservation)”という3つの管理方針が生まれた。これらの流れを第一次大戦前、大戦間、第

このプレビューでは表示されないページがあります。

訳者あとがき

小池 孝良

本訳書(*Forest Aesthetics*)の存在を知ったのは、訳者の1名、小池孝良が北海道大学農学部の伝統的科目・森林美学の講義の準備のために、資料をインターネット上で検索している時に、“Heinrich von Salisch”のキーワードとともに“ヒット”した時であった。1902年に刊行されたフォン・ザーリッシュの*Forstästhetik*の第2版が、2008年にアメリカで翻訳・刊行されたのである。この“発見”を同じく訳者の1名、清水裕子博士に連絡し、一挙に翻訳の話が進んだ。直ちに、出版元のアメリカにある森林史協会(Forest History Society : FHS)に連絡を取り、会長のスティーヴン・アンダーソン(Steven Anderson)博士から翻訳の了解と翻訳者の1名であり英訳本の著者でもあるウォルター・クック(Walter Cook Jr.)ジョージア大学名誉教授への紹介を得て、小池は翻訳の条件であるFHSの会員になり、訳出に取りかかった。そしてクック教授からは日本語訳書への巻頭言を賜った。伊藤精晤・信州大学名誉教授の巻頭言と重複する点もあるが、訳者の背景を知って頂くために詳細を述べる。

ここで、頭初の監訳者4名のつながりを紹介したい。訳書に出会う2か月ほど前に、監訳者の1名、芝正己(京都大学→琉球大学)と訳者の1名・高橋絵里奈の同僚、伊藤勝久(島根大学)は、ミュンヘン工科大学(TUM)の開催したサマースクールの講師兼学生として南ドイツ・バイエルンの森で2週間の時を分け合った。この間、小池は森林美学発祥の地ドイツでは、とっくに閉じてしまったその講義が、北海道大学において100年以上に渡って講じられてきた、その事実を紹介した。芝と伊藤は森林美学の課題でもある森林認証と林道設計について、持続的森林管理を主題とする議論についてTUMの学生達と交わした。そして、ドイツ林学の開祖とも言えるコッタ(H. Cotta)によって設けられた大学演習林において、2005年に*Waldästhetik*(自然林の美学)を著したミュンヘン大学林学出身のシュテルプ氏(W. Stölb)とともに自然保護を中心とした山林経営のあり方を、サマースクール主催者で森林保護学・林政学のシャーラー

氏(M. Schaller、現在、ベルン応用科学大学)と自然神・キリスト教への尊厳を話し合った。そして、日本の林学の源流の地ドイツで共に学んだことをきっかけに、我が国の“林学”への貢献をしたいと3名で話し合った。これが大きな背景にある。

次に、巻頭言(日本語版序文)を寄せられた伊藤精悟とその門下生について紹介したい。遡ること1981年、小池は林野庁林業試験場に職を得て、上司であった坂上幸雄博士のもとで森林微気象と光合成研究に取り組んだ。この時に、坂上の師、今田敬一(“森林美学ノ基本問題ノ歴史ト批判”を著し、我が国における森林美学の史的総括を行った北海道大学造林学3代目教授)の教えを学んだことに原点がある。小池は、恥ずかしながら、最近まで、今田は森林微気象の研究者だと思いこんでいた。森林美学を講じるに当たって、前任の高橋邦秀・北海道大学名誉教授の“伊藤先生は京大院岡崎研究室へ進学されたが、その原点は北大にある”という言葉を頼りに、“今田・森林美学”の最後の継承者、伊藤精悟の編著書“森林風致計画学”から北海道大学の森林美学の流れを学ぶことになった。

伊藤精悟の紹介で清水の研究を知り、その後、開設された伊藤精悟が所長を務めるNPO森林風致計画研究所の活動からも学び、小池は森林美学の講義の継承に努めてきた。清水は森林美学から森林風致を主題に博士論文をまとめ上げた数少ない研究者といえるだろう。おりしも2009年度には、北海道大学農学部造林学講座開設百年を迎えた。これを記念して、我が国で唯一“森林美学”の教科書を刊行した北海道大学造林学初代教授の新島善直氏と高弟、村山醸造博士の教えを継承している、いわば“新島/今田 森林美学”の関係者が一同に集まり翻訳作業に取り組んだのである。

北海道大学では、“森林美学及び景観生態学”(現在、森林美学及び更新論)として開講されているため、当時、景観生態学の担当者、中村太士教授の協力を得た。そして森林美学の受講生や“森林美学”を覆刻された小関隆祺・北海道大学名誉教授の関係者と流域砂防学の丸谷知己教授の参加を得て、造林学研究室の教員、学生と研究員が翻訳に当たった。信州大学では伊藤精悟門下生とアルプス圏フィールド科学センターの小林元のグループが参加した。

さらに、アメリカでの森林美学の展開の背景を、監訳者の1名である伊

藤太一(筑波大学教授)が概説することによって、フォン・ザーリッシュの *Forstästhetik* 第2版が、なぜこの時期に英訳されるに至ったのかを明快にする論壇を得た。詳細は巻頭言を再度ご覧いただきたい。

ここで、現在において森林美学の原典を、合理主義の頂点とも言えるアメリカでの英訳書と解説を含め“ザーリッシュ/クックの森林美学”として日本語に訳出する意義を小池の視点から紹介したい。一つには、経済の合理化とグローバル化が世界の趨勢に成った現在において、資源戦略と持続的資源管理が注目されるに至ったことと、森林の持つ保健休養機能に注目が再び集まったことが上げられる。これは1995年にUNEP(国連環境計画)から刊行されたGlobal Biodiversity Assessment(地球生物多様性評価)に続き、同じくMillennium Ecosystem Assessment(ミレニアム生態系評価)が2000年に示され、その中で、Ecosystem Service(生態系サービス)の考えが提示されたことによって、達成への道筋が具体化された事とこれを総体として扱っている森林美学の今日的意義を知らしめたいという訳者一同の思いがある。

生態系サービスとは、生態系の有する“機能”のうち人間がその恩恵に預かる内容を“サービス”と称する。すなわち、光合成生産を基礎とする植物の一次生産も含む基盤サービス、水や繊維などの供給サービス、気候緩和や洪水防止などの調節サービス、そしてレクリエーションなど保健休養機能を含む文化的サービスの4つに生態系サービスは大別される。そして、この生態系サービスの持続的・高度利用を体系付けてきたのが、木材生産から利用までも含む林学あるいは森林科学の体系に他ならないのである。森林美学及び風景計画学の講義を担当された五十嵐恒夫・北海道大学名誉教授は、“林学において哲学が全面におかれた森林管理体系”と称した。真に言い当てている。

新島善直の教えである“自然をどのように残すか、自然をどのように再生するか”の言葉の原点は、彼が最も感化されたという明治期にミュンヘン大学林学科から招聘されていた森林植物学者でもあったハインリッヒ・マイル(Heinrich Mayr)教授との出会いにあるといえよう。いわば、哲学・思想を持って森林施業論として位置づけられる全てを包含する学問的体系こそ、“森林美学”であると、ここに主張したい。

我が国、特に原生林に近い森林を造り替える使命をもって開拓地であった

北海道に着任した新島と門下生・村山によって、ドイツ直輸入のフォン・ザーリッシュのいわば“人工林の美学”(=施業林の美学)を、日本の実情に置き換えて体系建てた“森林美学”が、北海道大学において講じ続けられる理由は、新島の先の言葉“自然をどの様に残すか、自然をどのように再生するか”にあると思う。そこには、表現こそ違おうが、生態系サービスの考えを既に打ち立ててきたことの見先性を感じる。

2度の世界大戦を経て、森林管理は必ずしも“森林美学”の理想には沿うことが出来なかったが、今こそ、森林美学のめざす“樹種の生育特性を踏まえ、システムとしての森林の機能を活かして持続的生産を続け、そこを訪れる人々に感銘を与える森造りの方法を探究する体系”へと、再度、向かうべき時を迎えた。それは今田の言う、森林美学のめざすところの一つであるメーラー(A. Möller)の恒続林思想(この思想は一時期、ナチス・ドイツに利用された。過度な伐採を行った隠蔽のため、恒続林思想を帝国自然保護法で支持した)を実践している江戸時代から続く三重県尾鷲の速水林業の格言とも言える“木一代、人三代”に収斂されよう。森林管理には世代を超えて受け継ぐべき思想と哲学が不可欠である。森林は子孫からの預かりものなのである。この思想と哲学の原点を“ザーリッシュ/クックの森林美学”にも求めたい。

我が国では、森林美学の導入は、東京大学の林政学の川瀬善太郎が紹介したことに始まり、本多静六、田村剛らに継承され、戦後の森林風致計画学講座設立に至った。また、京都大学では岡崎文彬によって森林美学における森林施業の重要性の再認識がなされた。その後、今田敬一と親交があったという筒井迪夫・東京大学名誉教授によって森林文化論へと展開された。また、今田の門下生、白井彦衛・千葉大学名誉教授によって、森林美学の理念は、造園学、ランドスケープ研究へと進められた。

クック氏も述べているが、19世紀後半にドイツで生まれ、20世紀後半にアメリカでその意義が取り上げられ、21世紀初頭に日本で森林美学へ注目が集まることに、時代の要請を感じるのには、訳者一同だけではない。そして、現在も、北海道大学では森林科学科の講義として継承されている森林美学の意義を“ザーリッシュ/クックの森林美学”を通じて、世界の中で位置づけられる体系としての森林美学を学び、森林における生態系サービスの持続的利用を進め



図1 ザーリッシュの墓標

勧められるままにランタンをお供えする荣誉を頂いた。静寂の中で偉大な人物の魂に触れる一時であった。

ていきたい。

2010年6月にはフォン・ザーリッシュ没後90周年記念講演会がポーランドで開催された。その後、我が国におけるフォン・ザーリッシュの森林美学の影響を紹介する機会を頂き、共監訳者らと現状を紹介させて頂いた。これは、森林美学の発祥の地であるシレジア地方(現在のポーランド西部)のポズナン大学・森林保護学科のガイアズドヴィッチ(Dariusz J. Gwiazdowicz)教授とヴィシニエフスキー(Jerzy Wisniewski)名誉教授らの努力による地元の偉人を讃える催しの一環であった。

また、2011年に開催された国際森林年記念シンポジウムの後、上記2名の招待によって、フォン・ザーリッシュ記念公園(森林)や、住居であった古城跡、公園内にあるザーリッシュの墓地(図1)などを訪問する機会を得た。ザーリッシュがオークの植栽を並木状に造成した場所と、絵画のような遠近法を採用して林道開設を行った場所に訪れ、今日の状況を確認することができた。オーク

は林内装飾に役立つばかりではなく、木材としても利用出来るサイズに達していた。林道については、シュテルプ氏(W. Stölb)が *Waldästhetik* (自然林の美学) (2005)で、ザーリッシュの森林美学が、時に絵画のような森林にもまなざしを向けていることを紹介しており、その実例の一つが林道による奥行き感の演出であった。彼は林地の高低差と山頂部に近づくに従って樹高が低くなることを利用し、林道の幅を山頂に向かって狭くなるように開設した。その結果、透視法(遠近法)と同じ効果が得られ、奥行きが100m程度のはずが、相当



図3 ヨハンナの塔

ザーリッシュの父が1850年に建設。現在はミリチュ森林管理署が維持。



図4 ヨハンナの塔からみたザーリッシュの森

10月末であると言うのに緑色の樹冠をもつニセアカシアが優占していた。

な奥行きを感じさせることに成功した。その「技法」は今も健在であった。

ザーリッシュの父が造ったというヨハンナの塔(狩猟塔)にも訪れることができた。塔の中は狭いが、ザーリッシュも登ったのかと思うと感動のものであった。また、塔からの眺めが、北海道大学苫小牧研究林の眺めとそっくりであることにも感銘を受けた(図3・4)。

これらの経験のお陰で、翻訳の際に、いくつかの部分は現地の状態に即して訳すことができたと思う。

訳書の出版に当たっては海青社の宮内 久氏の励ましを受けた。宮内氏は日本森林学会の会員にも成ってくださり、本書訳出に対する理解を示されたことに深く感謝する。なお、ドイツ語の地名や人名には、大澤元氏(信州大学名誉教授)と、植物解剖・形態学の用語は、渡邊陽子氏(北海道大学農学研究院・研究員)の懇切なる支援をいただいた。記して感謝したい。最後に、北海道大学農学部造林学講座諸兄のご支援に深謝する。なお、本文では、いたるところに難解な文学的表現が多用されており、翻訳は原文英語になるべく忠実に行ったが、一部意識し、直接ドイツ語から訳した箇所も含むことを御了承頂きたい。また、専門用語は、藤森隆郎(2003)「新たな森林管理」を参考にした。

訳者を代表して。北海道大学農学部造林学研究室にて

このプレビューでは表示されないページがあります。

●監訳者

小池孝良・清水裕子・伊藤太一・芝 正己・伊藤精悟

●訳者 (50音順。所属は翻訳当時を示す)

青山 千穂 AOYAMA Chiho (北海道大学農学院)
秋林 幸男 AKIBAYASHI Yukio (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)
飯島 勇人 IJIMA Hayato (北海道大学農学研究科)
伊藤 精悟 ITO Seigo (森林風致計画研究所・信州大学名誉教授)
伊藤 太一 ITO Taiichi (筑波大学生命環境系)
稲田 友哉 INADA Tomoya (北海道大学農学部)
伊森 允一 IMORI Masakazu (北海道大学農学院)
岩崎 ちひろ IWASAKI Chihiro (北海道大学農学部)
浦田 格 URATA Tadashi (北海道大学農学院)
江口 則和 EGUCHI Norikazu (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)
大澤 元 OSAWA Hajime (信州大学名誉教授)
岡崎 朝美 OKAZAKI Tomomi (北海道大学文学研究科)
唐木 貴行 KARAKI Takayuki (北海道大学農学院)
小池 孝良 KOIKE Takayoshi (北海道大学農学研究院)
小林 元 KOBAYASHI Hajime (信州大学アルプス圏フィールド科学教育研究センター)
小林 真 KOBAYASHI Makoto (北海道大学農学院)
小山 泰弘 KOYAMA Yasuhiro (長野県森林林業総合センター)
齋藤 秀之 SAITO Hideyuki (北海道大学農学研究院)
坂本 朋美 SAKAMOTO Tomomi (京都大学農学研究科)
佐藤 香織 SATO Kaori (北海道大学農学部)
澤島 拓夫 SAWABATA Takuo (近畿大学農学部)
芝 正己 SHIBA Masami (京都大学フィールド科学教育研究センター)
渋谷 正人 SHIBUYA Masato (北海道大学農学研究院)
清水 裕子 SHIMIZU Yuko (森林風致計画研究所)
庄子 康 SHOJI Yasushi (北海道大学農学研究院)
末次 直樹 SUETSUGU Naoki (北海道大学農学院)
高橋 絵里奈 TAKAHASHI Erina (島根大学生物資源科学部)
龍田 慎平 TATUTA Shinpei (北海道大学農学部)
内藤 小夜子 NAITO Sayoko (北海道大学農学院)
中森 由美子 NAKAMORI Yumiko (和歌山県林業試験場)
長谷川 悠子 HASEGAWA Yuko (北海道大学農学部)
林 勝也 HAYASHI Masaya (株式会社アンドー)
春木 雅寛 HARUKI Masahiro (北海道大学地球環境科学研究院)
日向 潔美 HINATA Kiyomi (北海道大学農学院)
丸上 裕史 MARUGAMI Yushi (北海道大学農学院)
丸谷 知巳 MARUTANI Tomomi (北海道大学農学研究院)
矢沢 俊吾 YAZAWA Shungo (北海道大学農学院)
横関 隆登 YOKOZAKI Takato (東京大学農学生命科学研究科)
笠 小春 RYU Koharu (北海道大学農学院)
渡辺 誠 WATANABE Makoto (北海道大学農学研究院)
渡邊 陽子 WATANABE Yoko (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

Heinrich von Salisch Forest Aesthetics

はいんりっひふおんぎーりっしゅしんりんびがく

H・フォン・ザーリッシュ 森林美学

発行日 ————— 2018年6月1日 初版第1刷
定 価 ————— カバーに表示してあります
英訳・解説 ————— ウォルター・L・クック・Jr.
ドリス・ヴェーラウ
日本語版監訳 ————— 小 池 孝 良
清 水 裕 子
伊 藤 太 一
芝 正 己
伊 藤 精 晤
発 行 者 ————— 宮 内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台 2-16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax. (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp/>
郵便振替 01090-1-17991